終わりの空

shiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終わりの空

【Ｎコード】
Ｎ６４７２Ａ

【作者名】
ｓｈｉｋｉ

【あらすじ】
あの日世界は終わった。それでも僕らは生きている。だってそうするしかなかったから。終わりと終わりの間。変わってしまった世界に起こるショートショート・ストーリー。

空飛び猫の話（前書き）

文才も無ければセンスも無いし、経験も持たない人が書いたものなので至らぬ点はごりょうしょう下さい。
適当に場面想像しながらどうぞ。

空飛び猫の話

やっぱり少し寒い。何か羽織るものを持ってこようか。
その日僕は早起きをして散歩に出ていた。
太陽だって欠伸をするような時間。少し肌寒いけれどこの静寂な空気は僕にとってはなにより心地良い。

「まぁ、いいか」

引き返すのも面倒臭い。
時間を壊してしまわないように、ゆっくりと歩く。
僕は三日に一度は行うこの散歩を大事な習慣にしている。習慣は知らないうちに心の支えになることだってあるだろう。そして僕が空飛び猫に初めて出会ったのはそんな時だった。

「あの箱はなんだろう」

道端の、電柱の影に茶色の箱が置いてある。近くに寄ってみるとそれが段ボールであることがわかった。
そして後悔した。除いてみて中に入っているのが猫だとわかったから。
やれやれどうして、捨て猫なんかに会ってしまったんだろう。僕にはどうすることだって出来ないのに。
段ボールの中には小さな子猫が入っていた。真っ白で綺麗な顔付きだ。

「こんなに美人なら、きっと誰かに拾ってもらえるよ」

立ち上がろうとした時、僕の目に妙なものが見えた。

――翼。
この猫、翼が生えてる。
僕が慌てて後ろに飛退いた時、
「ミャア」
と子猫は小さく鳴いた。
とびきり愛らしい、天使の声で。
僕にはどうすることだって出来ない。
人は皆、自分にしか出来ないことを持っている。
そして、その逆も。それは僕の１８年間の人生から得た一つの教訓だ。
この世界に対する僕の干渉は、あまりに小さくて何も見えない。
そう、あの子猫よりもずっと、ずっと小さくて。
――半年前、世界が終わった。
原因はわからない。
この星に隕石が落ちてきたのかもしれないし、或いは大地震が起きたのかもしれない。それとも何処かの愚かな人達が戦争を始めたのか――
原因はわからない。
ただ僕らは終わった世界の中で生きている。
だってそうする他になかったから。
しかたがなかった。
何だって放っておけば色褪せてしまうのだから――
結局、僕はあの翼の生えた子猫を置いて帰った。
僕は歩きながら考える。

見間違えたのかもしれない。でもあれは—

「あれは確かに翼だった」

子猫の呼吸に合わせて揺れる翼が、目にありありと浮かんだ。

そして次の日僕が様子を見に行った時、段ボールの中は空だった。
東の空が真っ赤な朝焼けに染まったのは、それから四日後のこと。
異常な赤だった。
ヒナコは言う。

「もう持たないのかもしれない」
「持たないって、何が」
「この世界が、だよ」
「うん」
「こんなハズじゃあなかったんだと思う。本当はね」

僕らはよく並んで歩きながら、いろんな話をした。

「——もともと寿命が近かったのかも知れない。偉い人達は一生懸命頑張ったけど、それでもやっぱり駄目だったんだって」
「そっか」
「悲しい？」
「よくわからないよ」
そこで話は途切れた。
これからどうなるかなんて誰にもわからない。
誰にも。

「ヒナコ、この前、この道で捨て猫を見たんだ」
「捨て猫？」

「まだ子猫だった。白くて、背中に翼が生えてた」
「――そう。じゃあきっと空飛び猫ね」
「え？」
「童話だよ」

童話？

「荒れた町に生まれた空飛び猫は、やがて森に旅立つの。そこで素敵な居場所を見つけるのよ」
「じゃあ、僕が見た子猫も――」

それからヒナコは優しく微笑んだ後、またねと言って道を引き返した。その日僕は、誰もいない公園のジャングルジムの天辺で、沈みかけの夕陽を眺めていた。
ヒナコの言っていることは本当なんだろうか。
世界の終わりの話。
どうして終わってしまったんだろう。
――でも気付いていたのかもしれない。本当は知っていたのに、気付かないふりをしていた。
そう、どうすることだって出来ないから。
――本当に？

「だってしょうがないだろう」

僕らが間違いに気付くのは、いつだって最後の時。

もうじき夕焼けも終わろうとしている。
ヒナコが教えてくれた、空飛び猫の話。
――荒れた町に生まれた空飛び猫は、やがて森に旅立つ。そこで素敵な居場所を見つけるの。

「――居場所」

その時、僕の鼻に冷たいものが落ちた。

「あっ、雪だ」

空を見上げたその時、僕の視界に入ったものは、薄暗くなった空から舞い落ちる粉雪と、下手くそに飛ぶ小さな白い何か。

「――空飛び猫」

季節は初夏。粉雪が舞った六月。

カエル町の話（前書き）

カエルの町にカエルはいない。
カエルを見る目にカエルが写る。
人の道無きカエル道。

カエル町の話

『この先カエル町↓』

ヒナコが見つけた看板には確かにそう書かれていた。

――半年前、世界が終わった。それはつまり、壊れたということかも知れない。

僕らのいる今は、終わりと終わりの間の、僅かな時かも知れない。

「カエル町だって」

ヒナコが言う。

「そうらしいね」

今日、僕が公園に向かうとそこでヒナコと偶然出会い、折角なので一緒に散歩することになった。

それで、この状況。

「なんだろう」

「あんまり良い印象じゃないね」

「行ってみない？」

「えっと」

看板は公園の端に立ち、その矢印の示す方向は腰まである草木で鬱蒼としている。

道がないことは一目でわかった。

「着替えた方が良いと思う」

ヒナコは別にいいよと言って笑った。

それで僕らは出発した。

ヒナコはよく笑う。
それが僕を慰める為なのかはわからないが、それで僕の憂鬱は少なからず解消された。お気楽だなあ。

時刻は昼過ぎ。夏の一番暑い時。
ガサガサ音を立てながら、草を分けて歩くので、なかなか進行しない。ヒナコは僕の前を歩いている。
後ろを振り向くと、やや小さく見えた公園のジャングルジムが、太陽の光で輝いていた。

「うわわっ」
「どうした？」
「なんか地面がぬかるんでる」
「昨日の雨のせいかもね。引き返す？」
「んー」

ヒナコは振り返らずに進む。どうやら帰るつもりはないらしい。

「そんなにカエル町に行きたい？」僕は言った。

「うんっ」

はいはい。

僕らの期待に反してその町は一向に姿を表さなかった。
どうも僕らのいる場所は町の外れのだだっ広い野原のようで、前に

も後ろにも何も見えなかった。一面緑色だ。

「カエル町ってどんな所かな」

「そりゃあ、カエルの町じゃない？」

ヒナコは前髪を掬い上げて汗を拭いている。

気付けば僕も汗だくだ。

「まだカエルなんて生きてるのかな」

「…」

睨まれてから僕は気付く。

「ごめん、失言だった」

「よろしい」

――あの日から滅多に生き物を見なくなった。

まったく夏だというのに、それらしいのはこの暑さだけだ。

草跳ねる虫も、夜吠える犬も、空飛ぶ猫も――じゃなかった空飛ぶ鳥も。

あの空飛び猫に会ってから二週間経った。

いくら考えてもわからない。どうして今更、あんな生き物が生まれたりするんだろう。この先なんて無いのに。投げられた賽は、その目を出すまで落ちていくしかない。

「また考え事ですか」

「えっ」

「二人でいるのに、独りで考え込むのって悪い癖だよ」

「ああ…ごめん」

「ふふん」

それがどんな意味の
「ふふん」
なのか、僕はいつまでもわからない。

僕は１８年間暮らした自分の街に、こんな草原があるなんて知らない。
かと言って元々は何があったのかもわからない。世界とは所詮そんなものだ。ゆっくりと流れる時間に反して、目まぐるしく姿を変える。
――変える。
――カエル？
変える町――変わる町？
ふん。
人の道なきカエル道に足を踏み入れてから約二時間。日も傾き始めたし、そろそろ帰らないと暗くなってしまう。
でもヒナコはまだ僕の前を歩いている。道が悪いから疲労も大きい。

初め腰まであった草々も、脛の高さまで低くなり、
ようやく歩きやすくなったと思ったころで、景色に変化があらわれた。

「ヒナ――」
「丘だぁ」

溜息混じりの声。

「ここが――カエル町？」

そこは殺風景な所だった。
ただひとつ、なだらかな坂になった草原の先に、とても大きな木が見える。
丘の方では草も疎らで、その大きな木だけが聳え立っていた。
――いや、よく見ると手前に小さな…看板？

「ねぇあれって…」
霞んだ笑顔に弾んだ声。

「うん」
そうだね。

『ようこそ！この先カエル町』

――呼吸を整えたヒナコが言った。
「ほら、来て良かったでしょ？」

僕らが丘だと思っていたそれは盛り上がった崖の一端で、大樹は崖の縁に立っていた。
そこから見下ろす景色を見て理解する。

「そうだね」
大きな木陰の下、堪え切れずに、僕とヒナコは笑い転げた。

確かにここは
「この先カエル町」
だ。
きっといつか、この先、それはもう立派なカエルに育つだろう。

眼下にあるのは大きな湖。
楕円の形の湖に注ぐ一本の川、両端からは小さな足が延び始めていた。

そう、オタマジャクシ。

季節は夏。大きな木の下に佇んだ七月。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6472a/

終わりの空

2010年10月21日21時44分発行